

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 1日現在

機関番号：62608

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21520228

研究課題名（和文） 在外絵画資料による野郎歌舞伎の演技・演出研究

研究課題名（英文）

A Study of Acting and Direction of Yaro kabuki Using Overseas Pictorial Material

研究代表者

武井 協三 (TAKEI KYOZO)

国文学研究資料館・名誉教授

研究者番号：60105567

研究成果の概要（和文）：野郎歌舞伎の演技・演出の資料としては、絵画資料が重要な位地を占めている。この絵画資料は海外の美術館や図書館に所蔵されるものが多い。それらを現地調査し、初期の歌舞伎の実態を一部明らかにすることが出来た。とくにシカゴ美術館蔵において、17世紀後半の歌舞伎の舞台面を多く所載する『役者絵づくし』の最も古い版を発見したことは、学界への大きな貢献であった。これにより、歌舞伎の基本的な性格に「流行風俗の描写の重視」があることを提言できたことが、本研究の成果である。

研究成果の概要（英文）：Pictorial material is regarded as important for the study of acting and direction of Yaro kabuki. A great number of such pictorial materials are owned by museums and libraries overseas. Through field work research, I was able to show some of the actual conditions of early kabuki. I feel that the discovery of the oldest edition of “Yakusha Ye-zukushi”, which contains many pictures from kabuki stages of the latter half of the 17th century, at the Chicago museum, has greatly contributed to the field of study. Through this study, I was able to suggest that the fundamental character of kabuki considers the depiction of fashionable customs as important.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：近世文学・歌舞伎

1. 研究開始当初の背景

本研究では、野郎歌舞伎を演技・演出という視点から研究した。演技・演出、つまり実際の舞台上でなにが行われていたのかの究明は、歌舞伎研究の中核となるべき研究でありながら、資料の不足のため、研究成果はごくわずかであった。本研究は、この閉塞状況

の打開を目指すものであった。

2. 研究の目的

本研究は、野郎歌舞伎の演技・演出を明らかにすることを目的としている。野郎歌舞伎とは、歌舞伎史において初期の時代に属する、17世紀後半(1652年から1680年まで)の

歌舞伎の呼称である。初期の歌舞伎の演技・演出の実態を解明することは、歌舞伎が、どのような性格を持って生まれてきたかを解明することにつながるだろう。これは、歌舞伎という我が国固有の芸能の本質を究明するための、確固たる導入部になるはずである。本研究では、特に在外絵画資料に着目して考察を進めた。

3. 研究の方法

本研究は、野郎歌舞伎の演技・演出を明らかにするため、海外の美術館・図書館などに所蔵される野郎歌舞伎を描いた絵画を、研究資料として活用するという方法を採用した。申請者がすでに野郎歌舞伎を描いたものとして把握している絵画資料を中心に、所蔵機関を訪れ、現地で原資料を実見・調査し、写真によって資料収集を実施した。これと並行して、成立年代考証などの研究を進め、論文を執筆しその成果を学術雑誌に発表した。

4. 研究成果

本研究では、海外に所蔵される絵画資料数点に着目して、野郎歌舞伎の演技・演出についての考察を進めた。最も成果のあったシカゴ美術館蔵『役者絵づくし』について以下、詳細に記しておく。

『役者絵づくし』は、野郎歌舞伎・元禄歌舞伎の基礎資料として夙に声価が高く、歌舞伎の概説書などにもしばしば利用されてきた資料である。舞台面の絵が豊富に収録されているため、とくに演技・演出研究にとっては、貴重にして重要な資料と考えられてきた。ところが『役者絵づくし』の版本の所蔵先は、あまり知られておらず、原本を実見した人は少ない。ほとんどの研究は『稀書複製会叢書』の複製本を利用してきたのが実情である。

『役者絵づくし』には刊記がない。そのため、年代の特定がむつかしく、演技・演出史の重要資料であるにもかかわらず、利用には躊躇のある資料だった。本研究では、国文学研究資料館が購入した原本とともに、筆者が披見した諸本についても考察し、それら諸本の成立年代を考証した。もって野郎歌舞伎から元禄歌舞伎にかけての演技・演出研究の基盤の一つを提供したものである。

さらに、新出の国文学研究資料館収蔵本によれば、『稀書複製会叢書』本では消えてしまっている、象眼いわゆる「雁首のすげ替え」の痕跡を指摘できる。『役者絵づくし』は絵画史の上からも注目すべき資料であることが判明した。さらにこのことは、歌舞伎という芸能の本質に「当代の流行風俗の描写を重視する」ということがあることを、実証的に明らかにすることとなった。

横山重、信多純一、松崎仁の各氏は、『役

者絵づくし』は貞享末年(元禄元年・1688年)刊行としている。

『役者絵づくし』が江戸の出版物であることは明らかなのだが、元禄元年では、江戸に居るはずのない役者が描かれている。元禄14年3月刊行の『役者略請状』に「此人上方にて敵役の名人…とあづまにかくれなく、此たび始めて江戸諸見物に御対顔を得られ」と記されている。小野山宇治右衛門は元禄13年(1700年)11月の顔見世のときに江戸に初めて来たことが明らかで、元禄元年には江戸に不在なのである。

哥村十次郎、早川はつせ、秋田彦四郎についても同様のことが指摘できる。つまり『稀書複製会叢書』本の『役者絵づくし』は、元禄元年の刊行ではおかしい、元禄14年度以降の刊行でないとおかしいということになるのである。

研究代表者武井は、シカゴ美術館ではじめて『役者絵づくし』の版本に接することができた。シカゴ美術館本は、完本ではなかったが、『稀書複製会叢書』本には存在していない役者連名が各巻の冒頭に付載されているという、思いもよらない発見があった。これは当時の江戸四座のうち市村座を欠く三座、中村座・山村座・森田座の役者連名であった。

その後、平成22年に『役者絵づくし』完本が市場に出現し、国文学研究資料館の所蔵に帰した。これは『稀書複製会叢書』本の底本になったものである。またその直後、関谷徳衛氏のもとにも『役者絵づくし』が在ることが判明した。

これらの本を中心に、諸本を比較調査すると、シカゴ本系、関谷A本系、国文研本系の三系統に分かれることが確認された。シカゴ本系、関谷A本系、国文研本系は刊行年代が異なると考えられる。

「花村きぬへ」や「西国伝蔵」の名前の削除や埋木の痕跡が発見できた。これらのことから、シカゴ本は関谷A本・国文研本に先行して刊行されたものということが推定された。

それでは、関谷A本と国文研本の先後関係はどうなるのか。「宇治右衛門」「哥村十次郎」「あき田彦四郎」「早川はつせ」の四人、つまり元禄元年には江戸に居ないはずの四人の名前は、関谷A本の該当部分との比較によって、いずれも改刻に成るものだということが判明した。この点から国文研本は、元禄14年度以降ということが確定され、関谷A本より後の版ということになるのである。

『役者絵づくし』のシカゴ本系には今まで知られていなかった役者連名が付載されていた。この役者連名に載る役者の顔ぶれは、『大和守日記』などの資料と比較検討することにより、元禄元年度のメンバーであることが判明した。

つまり『役者絵づくし』はシカゴ本系が元

禄元年、国文学研究資料館本系が元禄14年、関谷A本系が両本の間の刊行ということが確定できた。このことにより、はじめて『役者絵づくし』は、野郎歌舞伎の演技・演出を探るための確固たる位地を獲得したのである。

ただし『役者絵づくし』はシカゴ本が初版なのか。武井は、それ以前に「幻の初版本」があると推量し、これを貞享2年ころの刊行としたが、この点はまだ確実な説とはならず、今後課題を残している。

諸本の年代考証の結論は次のようになる。

①第1版 初版本(未発見) 貞享2年(1685年)度前後刊(推量) ②第2版 シカゴ本(=関谷B本) 元禄元年(1688年)度(貞享5年度)刊(確定) ③第3版 関谷A本(=ボストン美術館A本) 元禄2年度~元禄13年(1700年)度刊(推定) ④第4版 国文研本(=大英図書館本=神戸女子大学本=『稀書複製会叢書』本) 元禄14年(1701年)度刊(推定)、元禄14年度以降刊(確定)

絵入り本や浮世絵に「象眼」という技法がある。板木の一部、とくに人物の顔の部分を削り去り、新たに彫った顔を埋め木して人物を新しくする手法で、俗に「雁首のすげ替え」と称される。この技法の早い例は、元禄15年の『しだれ柳』に見られるが、元禄14年度刊行と推定した国文研本『役者絵づくし』は、象眼が確認できる最も早い例になる。

シカゴ美術館本と国文研本を比較検討すると、象眼の施されている絵は合計4面、5名の役者の雁首がすげかえられていることが判明した。一例を挙げると、シカゴ本と国文研本の第三巻十ウには「市川団十郎」が描かれている。丹前出端の演技と思われる団十郎の、姿形と扮装は同一だが、その顔が異なっている。髪型はいずれも立て髪で共通しているが、国文研本は眉、目尻、鬢(びん)などがシカゴ本とは異なり、顔全体が改変されている。

国文研本の団十郎は眉と目尻が鋭くはねあがり、鬢も銀杏型にはえ下がって、シカゴ本の端正な顔立ちとくらべ、敵役にふさわしいものになっている。これは、元禄初期から後期にかけて、団十郎の扮する役柄が変化してきたことを反映して、雁首をすげかえたものであろう。

国文研本の、中川半三郎、上村左源太の二名についても象眼が見られるが、これらは顔の一部のみが改刻されている。中川半三郎は耳と鼻の中央あたりから上、上村左源太は口のあたりから上が差し替えられている。

これは、シカゴ本では、すでに流行遅れになっていた髪型を、元禄14年ころ流行の髪型に改変したのである。

時代の先端風俗の描写こそ、歌舞伎の人気の根底をささえてきたもので、歌舞伎という

芸能の生命線であった。『役者絵づくし』は、諸本を比較することによって、歌舞伎にとって当代風俗の描写が、いかに大事なことであったかを示している。

上記に記したように、本研究の最終段階で発表した論文「『役者絵づくし』の研究-諸本紹介・成立年代考証・象眼-」(『国文学研究資料館紀要』39号所収)は、歌舞伎の演技・演出の本質には、流行風俗の描写があることを摘出した。これは、本研究の大きな成果であった。

もう一点、成果論文を上げておく。『浮世絵芸術』166号に掲載予定の「歌舞伎・浄瑠璃の絵画資料二題」である。

これは国文学研究資料館所蔵の菱川師宣の新出誌料「杉山肥前掾人形芝居小屋前の図」と出光美術館所蔵「歌舞伎図屏風」の景観年代と製作年代を考証したものである。

「杉山肥前掾人形芝居小屋前の図」は寛文12年(1672)前後の景観を描くもの、「歌舞伎図屏風」は寛文2年(1662)前後の景観を描くものと考証した。ともに製作年代は、離れるかも知れないとの留保をつけたが、景観年代とほぼ同時期に描かれた可能性も高い。「杉山肥前掾人形芝居小屋前の図」は、寛文11年の「浄瑠璃物語」ヒット興行に即応して製作されたものと推定できる。「歌舞伎図屏風」は、寛文元年の京役者の江戸下りに即応して製作されたものと推定できる。この二つの屏風絵には、どちらにもトピックスに対する即応性、タイムリーな性格を指摘することができるのである。近世初期の肉筆風俗画の、こういった性格については、従来ほとんど指摘がなく、この発見は、日本美術史研究に資するものと考えている。さらに景観年代を特定できた両資料、とくに「歌舞伎図屏風」は野郎歌舞伎の舞台面を描いているので、演技・演出研究を進める上での基礎資料として、整備が完了したことになる

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

- ①武井協三、歌舞伎・浄瑠璃の絵画資料二題、『浮世絵芸術』166号(掲載予定)、2013年、P. 38-47、査読なし
- ②武井協三、『役者絵づくし』の研究-諸本紹介・成立年代考証・象眼-、『国文学研究資料館紀要』39号、2013年、P. 1-52、査読なし
- ③武井協三、忍頂寺文庫の芸能資料-『女意

亭有嘶』を中心に、国文学研究資料館公募共同研究成果報告書『近世風俗文化の形成－忍頂寺務草稿および旧蔵書とその周辺－』2012年、P.97-106、査読なし

- ④武井協三、Kabuki and Buddhist Art、
『INTERNATIONAL CONFERENCE ON ”
TOWARDS ORIENTAL THEATRE STUDIES”』
(Jahangirnagar University ,
BANGLADESH) 、2012年、P.7-14、査読なし
- ⑤武井協三、歌舞伎と琉球・中国、笠谷和比古編『18世紀日本の文化状況と国際環境』(思文閣出版)2011年、P.419-438、査読なし
- ⑥武井協三、碁盤の上のカラクリ人形、『平成21年総研大葉山高等研究所フォーラム報告書』2009年、P.149-160、査読なし
- ⑦武井協三、藩政記録と芸能史研究、『芸能史研究』186号、2009年、P.52-63、査読なし

〔学会発表〕 (計4件)

- ①武井協三、江戸薩摩藩邸における芸能上演、芸能史研究会東京例会シンポジウム基調報告とコーディネーター、2012年12月2日、同志社大学
- ②武井協三、江戸藩邸における芸能上演、連続シンポジウム「御冠船踊り－近世琉球の自己表象－」コメンテーター、2011年3月19日、沖縄県立博物館・美術館
- ③武井協三、シンポジウム基調報告、忍頂寺文庫の芸能資料－『女意亭有嘶』を中心に、2010年10月30日、大阪大学
- ④武井協三、『役者絵づくし』のことなど、演劇研究会、2010年4月24日、同志社大学

〔図書〕 (計1件)

- ①武井協三、福田千鶴、『増補版 江戸記録一覧稿』国文学研究資料館、2010年、120頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

武井 協三 (TAKEI KYOZO)
国文学研究資料館・名誉教授

研究者番号：60105567

(2) 研究分担者
()

研究者番号：

(3) 連携研究者
()

研究者番号：